

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：13601
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：21K10680
研究課題名（和文）精神科領域で当事者と共に安心の場を創る改良型包括的暴力防止プログラムの作成

研究課題名（英文）Establishment of the Improved Comprehensive Violence Prevention and protection Program to build a Safe psychiatric inpatient settings for both users and medical staffs

研究代表者
下里 誠二（Shimosato, Seiji）
信州大学・学術研究院保健学系・教授

研究者番号：10467194
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：CVPPPを改良する視点を当事者と共に検討した。当事者参加で研修会を開催すると同時に、元気回復行動プラン（WRAP）、哲学などの視点を通して当事者と共に課題を明確にするためセミナーを開催した。結果権利擁護の視点を強調すること、またクライシスプランにおいて、CVPPPによるサポートが当事者の望む介入法に選ばれるように、改良を重ねる必要があると考えられた。次にエスコート法に関する検証として、CVPPPによる正規法とそうではない非正規法で比較を行った。結果、権利擁護の重要性を強調できた。またエスコート法の検証ではCVPPPの方法が安心できるものである可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果、当事者の危機的状況に際して、権力勾配に基づく力（force）に配慮し、相互作用を考えると、医療の中でも医療優先の強制性を発揮しないために、CVPPPはあくまで医療化されないところから考える必要があるという理念を持つこととした。クライシスプランで当事者から認められる介入方法となっていくという方向性も示されたが、このことは、CVPPPを当事者と共同創造することを継続していくことによって、当事者の権利擁護につながるものであることが示された。また、エスコート法の検証についてもこれまでになかったCVPPPの技法に関して始めてエビデンスを検証したものであり、意義の大きなものであった。

研究成果の概要（英文）：Perspectives for improving the CVPPP were discussed with the user concerned. Training sessions were held with the participation of the users and at the same time seminars were organised to clarify issues together with the users through perspectives such as the WRAP and philosophy. As a result, it was considered necessary to emphasise the perspective of rights protection and to improve the Crisis Plan so that CVPPP support is selected as the intervention method that the parties want to use. Next, as a validation of the escort method, a comparison was made between the CVPPP method and non-CVPPP methods. The results emphasised the importance of rights protection. The validation of the escort method also suggested that the CVPPP method may be a safe one.

研究分野：精神看護学

キーワード：包括的暴力防止プログラム CVPPP 共同創造 権利擁護

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

精神科における当事者による攻撃的な行動は、精神科病院の中でも完全に犯罪性を帯びたような理不尽な暴力もあるが、精神科ケアの対象となるものは、幻覚妄想状態、激しい精神運動興奮状態、重度の認知症者の周辺症状、強度行動障害による自傷行為など疾患による当事者の危機状態である場合の他、強制入院という治療構造に拒否するための意思表示の場合などである。こうした行動に対して、研究者らは Person-centered という理念のもと、包括的暴力防止プログラム (Comprehensive Violence Prevention and Protection Program: CVPPP) を開発し、普及と効果検証を行ってきた。しかし、徒手拘束法という身体介入法を含むプログラムには誤解も多かった。CVPPP は当事者に絶えず声をかけ、反応を感じ、当事者の声にならない声に応え対話しようとする姿勢 (中村, 2012) の重要性を主張してきた。しかし身体介入で当事者を拘束するイメージが強くなった。このような誤解が生じた背景には当事者の関与がなかったことが考えられた。近年の当事者運動に始まる「リカバリー」運動は、精神科病院での暴力対応が医療者側が主導で行う保護としての関わりとなりやすかったことを当事者主体のケアに転換する必要性ももたらしている。このため、CVPPP を当事者とともに発展させ、リカバリーを重視した看護の技術へとつなげていく必要がある。現在の「共同創造」を CVPPP にも適用する中で、安心安全の環境を提供できるようになる。

また、精神科医療では、本年の神出病院事件のようにいまだ看護者による虐待事件が途絶えない。本研究によって、看護者による虐待も防止できるようになることも検討していく必要がある

2. 研究の目的

本研究では CVPPP のプログラムを当事者の方とともに見直し、当事者から見てもケアとして成立するようなトレーニングプログラムを検討し、提案する。また新しいプログラムを検証するとともに、身体介入のうち、最も多用されるとされるエスコート法に関するケアとしてのエビデンスを確立し、当事者にも安心して受けられるプログラムへと改良することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 当事者参画による CVPPP 問題点の洗い出しと修正案の作成

まず当事者で元気回復行動プラン (Wellness Recovery Action Plan: WRAP) のアドバンスファシリテーターである増川ねてる氏に CVPPP トレーナー養成研修の研修会で実際に研修を受講する形で参加していただき感想と意見を聞くこと、また他にも当事者からプログラムの改良に関する意見を聞くことにした。しかし、本研究中特に 2021 年、2022 年は新型コロナウイルス感染症の影響が強く、当初研修会の開催を検討したが感染拡大により中止となった。そのため、まず方法案を変更しながらおこなった。対面での研修会の開催が難しかったため先に当事者と共にオンラインでのセミナーを開催し、暴力、精神科ケアにまつわる共通知識を創ることを計画した。オンラインセミナーはまず、「WRAP x CVPPP でできること」としてオンライン対話会を 2021 年 11 月 14 日(日)に開催し、増川ねてるさんを招いて対話会を開催した。また、当事者とともに、精神科における暴力概念の整理のためのフォーラム「暴力概念をめぐるフォーラム」を 2022 年 2 月 19 日(土) 14:00-16:30 にオンラインで開催し当事者と意見交換を行った。この後精神障害当事者会ポルケ代表理事の山田悠平さんにも CVPPP についての意見を伺う機会を設けた。また、現在の CVPPP インストラクターを対象にして、2022 年 3 月 18 日(金) 18:00-19:30 「CVPPP のよいところ、わるいところ」というオンライン会議を開催した。さらに 2022 年 10 月 15 日には、CVPPP のための哲学フォーラムとして、1. 言語行為論とその暴力論的展開/転回 (静岡県立大学 飯野勝己さん) 2. 発話と共同コミットメント (大阪大学 三木那由他さん) 2022 年 10 月 22 日(土) には、NCNP 柏木宏子「リカバリーのための暴力リスクアセスメント SAPROF Structured Assessment of PROtective Factors for violence risk」を開催した。これに加え 2023 年には 7 月に「目標に準拠した評価をかんがえる」めがね旦那 (小学校教諭) 「子どものための CVPPP」として 2023 年 8 月 3 日に『知的能力障害を伴ったお子さんの養育背景とケア』を樋端佑樹さん (信州大学) 2023 年 8 月 10 日「強度行動障害の病棟ケア CVPPP との接点」鶴飼秀明さん (愛知県医療療育総合センター) を行った。さらに 2023 年 9 月 30 日には「おやじはニーチェ 認知症の父と過ごした 436 日」として認知症のケアについて高橋秀実さん (ノンフィクション作家) にも講師をお願いし、認知症へのケアについて検討する機会とした。

最終的に増川ねてるさんが参加した形で CVPPP トレーナー養成研修を行ったのは 2022 年 3 月 26 日(土) - 4 月 30 日(土)であった。この時、研修の間に、増川ねてるさんに参加してもらうと同時に CVPPP についての意見を聴く会議を 3 回行った。

これらのことから CVPPP プログラムについて修正案を検討した。CVPPP トレーナー養成研修が対面で完全に実施できなかったことから、演習案は 2021-2023 年には厚生労働省精神科医療体制確保研修 (日本公的病院精神科協会主催) の 1 日研修の中で、試行することとした。

(2) エスコート法の検証

エスコート法は研究者がその理論を作成したもので、当事者への負担がない方法で、移動を

サポートするものである(図1)。その方法は、当事者の腕をサポートする際、並んだ看護師が、当事者の腕を両側からサポートするものであるが、この時に当事者の腕を強く掴まずにサポートすることで負担感を軽減するとともに、当事者に友好的なメッセージを送るコミュニケーションとしての意味を持たせるものである。この方法についてエビデンスを検証するために、2021年から実験準備を開始した。2022年、実験手順に検討が必要と判断され、測定方法について、追加の機器を検討した。その結果2023年3月から12月にかけて47名の被験者により実験を行った。実験は以下の手順で行われた。研究は信州大学医学部倫理審査会の承認を得て行われた。



図1 エスコート法(片側のみ)

まず患者役となる被験者の右腕に対して、研究者が看護師役となり、エスコート法の正規法(研究者自身の手首を握ることでサポートする力をコントロールする、当事者の腕は握らない)と非正規法(当事者の手首を強く握ってサポートし、研究者自身の手には力を加えない)の二つの方法を施行した。試行の順番は性別を層化してランダムに割り付けた。実験はあらかじめ作成した音声ガイダンスに従い、アナウンス、安静(1分)、正規法か非正規法で5秒運動5秒休憩を3回繰り返す、アンケート記入、休憩(1分)、先ほどと逆の方法で5秒運動5秒休憩を3回繰り返す、安静(1分)、アンケート記入の手順でおこなった。研究者がつかむ手の人差し指と親指に圧力センサ(ショックチップ, タッチエンス社)を装着した。研究者が研究者自身の腕に入れる力はhand-held dynamometer (HHD) (MOBIE Z MT-100, 酒井医療器)で測定した。被験者の右肩甲骨に筋電計((PowerLab: ADInstruments社))の電極を装着し、また胸部には心拍モニタ(WHS-1, ユニオンツール社)を、右上腕に加速度計センサWHS-3(ユニオンツール社)を装着した。運動試行中はビデオで録画した。また、正規法と非正規法の主観の違いについては、SD法による質問調査を行った。

4. 研究成果

(1) CVPPP 理論の修正について

オンラインセミナーの結果を発表するとともに¹⁾⁻⁴⁾、研究者間でCVPPPの理論内容について検討をおこなった。

まず、オンラインセミナーでの当事者からの意見には、「当事者が精神科病院に入院している中で、当事者がその病状からしてしまいそうになる暴力は止めてもらいたい、ただしその方法は正しいもの、であっても欲しい」と止めてほしいという意見がある一方で、「現状をよくするための取り組みであることは理解できるが、《味方》という言葉には疑問を感じる部分がある。医療として、強制している中で、味方になりたい、と言われてもそう簡単にはできない。一方的に近寄ろうとされても困るのではないが、「物理的に手で触れるという行為は、触れてほしくない場面や部位も相手によって当然ある。力が「自由を奪う、傷つける手」となってしまう可能性もあるため難しい」「理論と身体介入は分けるべき。そうでなければいくら良いことをしようとしても、結局理解することが難しい」などの意見も見られた。さらに現在のCVPPPに対する、主に看護職からの意見としては、良い点として、以下のようなものがあつた。「看護者側からだけ見て、当事者を悪く評価していることについて、考える視点が多かった」「ねじ伏せようとか治そうとするのではなく、時間をかけて当事者と一緒に居ることができた。またそのことを周囲のスタッフが理解してくれているということが安心につながる。同じ理念を持つ仲間がいることは心強く、スタッフの安心につながる」「暴力を否定的にとらえることが少なくなった」「援助者も被害者にならないと言った意識をもてる」「暴力が生じる背景を学ぶことが出来る。広い視野と知識を持って当事者を救うことを考えられる」「同じ視点からリスクアセスメントができる」「2人で対応する際にすぐにエスコートの体制を意識し対応できる。」「力任せの対応ではないことがわかる」「関わり方に疑問やジレンマを抱える方々に対し、理念に基づいた答えを示せる」「行動制限最小化に対して、CVPPPの理念による説明が馴染む」「哲学的な内容でありながらわかりやすい。」「CBT・動機付け面接など技法を学んだが、あくまで治療技法である。CVPPPは人場面や技術に依存しない」「双方に大切にされていると感ずることが出来る」「暴力の問題は患者の評価に終始してしまうところがあるが、その問題自体を考えることができる」「一方で問題点としては、「CVPPPをやっているということで暴力的な事象への対応は期待されてしまう」「身体介入自体ものものしく、暴れている人を無理やり制圧しているように見える見た人が、再トラウマ体験になる」「現場では使えない」「こうした方が早い」という声がある」「身体介入のイメージが先行する」「全員知っていないとならない」「研修が長い、高い」「人によって熱心さが異なる」「必要かどうか意見が分かれる」「哲学の知識が難しい」「哲学であるので、明確な答えが出ないことに葛藤がある」「フォローアップ体制に課題がある」「ディエスカレーションをどうつたえるか?スキルか理念か?で迷う」「知っている人だけが熱心になるという点で宗教のようだ」「マイナーチェンジが多い」「身体的暴力の話だけになりがちのところ」「理念理論優先で手技忘

れがち。理論と手技は両輪であるべき」という意見が出された。こうしたオンラインセミナーの内容をもとに研究者間で変更点を検討した。結果次の点について修正あるいは、修正のための推奨事項とすることとした。

理念における「味方になること」の解釈として、同じ仲間になるのではないこと、あるいはなんでも言うことを聞くこと、と誤解されるのを避けるため、「同じコミュニティに属せるわけではないが、別のコミュニティにおいても同じ場所に安心していることができる共に在るという感覚であることを追記した。

WRAP®のクライシスプランの中で「隔離室でも、注射でもなく CVPPP のサポートテクニックで落ち着くまでケアしてもらおう」ことを希望してもらえるようなものにしていく必要がある。そのためにこの技法が無理やり隔離するために使われてはならない。また当事者による事前指示を有効なものにしていく取り組みも重要である

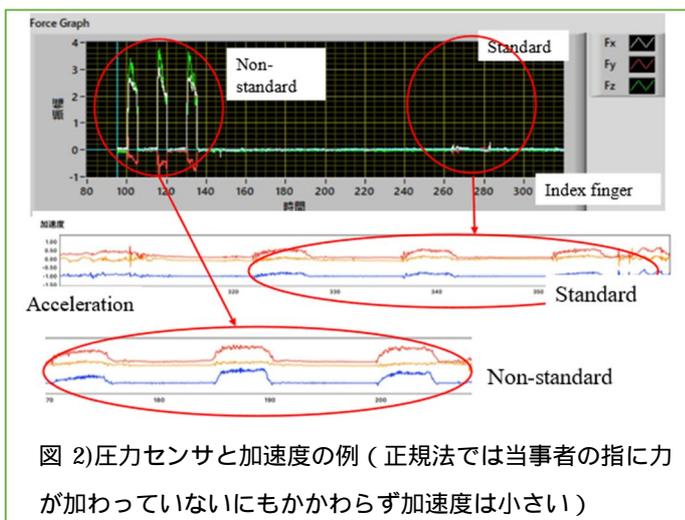
当事者の権利擁護を明確にすること、その際に当事者の尊厳を守ることがひいては看護職の尊厳につながっていくことを強調することとした。そのため、「医療の外から考える視点をもつ」ことを追記することとした。

リスクの中にある認知バイアスや、当事者を人間的に評価してしまうアセスメントから、暴力が起こるよりももっと前の事象に目を向け、当事者理解、がそのものアセスメントであるという理論とする。このことを踏まえたコミュニケーションがディエスカレーションとなる。この理論の基礎として共同行為論、言語行為論、共同性基盤意味論などが該当する。この意味でコミュニケーションの相互作用を重視する視点を持つことも必要となる。これには対人円環モデルを基盤とした演習を組み込む

暴力という単純化した言葉で終わらせず広い概念として暴力をとらえる。そのことで身体介入の本当に必要な状況を明確化する取り組みが必要となる。認知症の入院時や強度行動障害といった専門的な介入が必要な部門に目を向けていく必要がある。

虐待防止に期待される役割として、また欧米の流れも鑑みて攻撃性のケアを含むプログラムに認証制度を導入することが求められる。そのためには、カリキュラムを均質化し、モデル化していく必要がある。そのための組織体制とプログラム内容案について、検討し、現行の4日モデルから、内容を見直し、身体介入法を適正なものに見直し、演習内容の適正化を図っていくこと、また、組織体制を強化することを提案することとした。

(2) エスコート法の検証について、CVPPPによる方法(正規法)と通常の方法(非正規法)を実施した。参加者には、右肩三角筋に筋電図電極、右前腕に加速度計、心窩部に心拍モニタを装着してもらった。実験者は参加者の手首を握る右手親指と人差し指に圧力センサを付け、左手掌にハンドヘルドダイナモメータを握った。実験は47名の参加があった。実験はクロスオーバー試験として、正規法、非正規法を性別を調整して同数になるようにランダムに割り付けた。各法について5秒間3回ずつの試行とした。主観データ



として、参加者には各試行の後で、SD法による主観の程度を聞いた。試行は47名が参加したが、精密機械を利用していたため一部機器の不具合があり最終解析対象は40名となった。結果として、正規法では参加者の手首を強く握ることなく、非正規法では参加者の手首が強く握られた。この時、主観として、快適さ、温かさ、安心などの設問で、有意に正規法の方が大きい結果となった。このことから、正規法のほうが参加者の不快は少ないものと考えられた。

文献

- 1) 佐々木理恵, 下里誠二 (2022) 【当事者ととも創る CVPPP-その暴力はなぜ発生したのか-】 CVPPP と対等性についての対話. 精神科看護, 49(5), 35-41
- 2) 下里誠二 (2022) 理想論が実効性を持つために. 精神科看護, 49(5), 4-13
- 3) 下里誠二増川ねてる (2022) 対談 WRAP x CVPPP, 精神科看護 49(10), 15-24
- 4) 下里 誠二 (2023) CVPPP と共同性 当事者と創る CVPPP から広がる未来, 日本こころの安全とケア学会誌. 5 (1) .1-10

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 下里誠二	4. 巻 125(12)
2. 論文標題 包括的暴力防止プログラム (CVPPP) の一般精神医療への展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 精神神経学雑誌	6. 最初と最後の頁 1049-1057
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下里誠二、木下愛未	4. 巻 52(6)
2. 論文標題 攻撃性への対応: 当事者と共同創造する包括的暴力防止プログラム	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 715-723.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下愛未, 山田悠平, 相良真央, & 下里誠二	4. 巻 50(7)
2. 論文標題 (2023). 当事者, 学生, 教員がシラバスから共同創造する精神看護学へ.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 36-40.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下愛未, 山田悠平, 相良真央, & 下里誠二	4. 巻 50(11)
2. 論文標題 (2023). 当事者, 学生, 教員がシラバスから共同創造する精神看護学へ (2) 目標 (をなくすこと) について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下里誠二	4. 巻 50(2)
2. 論文標題 CVPPPと共同性 当事者と作るCVPPPから広がる未来 第5回 日本こころの安全とケア学会学術集会「共同するCVPPP」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 50-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下里誠二, 久松久美子, 中村日出夫, 萬代果恵, 木下愛未	4. 巻 64(2)
2. 論文標題 包括的暴力防止プログラムのためのケアシートに関する研究 事前事後評価および記述分析によるパイロットスタディ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本精神科看護学術集会誌	6. 最初と最後の頁 82-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下里誠二	4. 巻 49(5)
2. 論文標題 当事者とともに創るCVPPP その暴力はなぜ発生したのか 理想論が実効性をもつために「精神科領域で当事者と共に安心の場を創る改良型包括的暴力防止プログラムの作成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 004-011
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kinoshita Aimi, Shimosato Seiji	4. 巻 42
2. 論文標題 Effectiveness of an Aggression Management Training Program in Japan: A Quasi-Experimental Study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Issues in Mental Health Nursing	6. 最初と最後の頁 1~9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/01612840.2021.1999542	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下里誠二	4. 巻 3(1)
2. 論文標題 包括的暴力防止プログラムと虐待防止	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本こころの安全とケア学会誌	6. 最初と最後の頁 35-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下里誠二	4. 巻 45(5)
2. 論文標題 暴力への対応 包括的暴力防止プログラム 理論・法的側面編	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 救急医学	6. 最初と最後の頁 570-578
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下里誠二	4. 巻 48(5)
2. 論文標題 CVPPPの目指す新しい関係性(1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 70-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永池昌博, 下里誠二	4. 巻 48(6)
2. 論文標題 CVPPPの目指す新しい関係性(2)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村日出夫, 下里誠二	4. 巻 48(7)
2. 論文標題 CVPPPの目指す新しい関係性(3)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 72-73
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下愛未, 下里誠二	4. 巻 48(8)
2. 論文標題 CVPPPの目指す新しい関係性(4)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 72-73
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下里誠二	4. 巻 48(9)
2. 論文標題 CVPPPの目指す新しい関係性(5)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 74-75
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下里誠二	4. 巻 48(10)
2. 論文標題 CVPPPの目指す新しい関係性(6)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 74-75
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 下里誠二
2. 発表標題 包括的暴力防止プログラム(CVPPP)の開発と一般精神科ケアへの汎化
3. 学会等名 第118回日本精神神経学会 シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下里誠二
2. 発表標題 地域における統合失調症の理想と現実「危機介入（例：暴力行為）への対応」
3. 学会等名 第17回統合失調症学会シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 下里誠二
2. 発表標題 共催シンポジウム急性期病棟における当事者の攻撃性をどうケアしていくか
3. 学会等名 社会精神医学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下里誠二, 久松久美子, 中村日出夫, 萬代果恵, 木下愛未
2. 発表標題 包括的暴力防止プログラムのためのケアシートに関する研究 - 事前事後評価及び記述分析によるパイロットスタディ -
3. 学会等名 第28回日本精神科看護専門学術集会（オンライン）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下里誠二
2. 発表標題 CVPPPとはなんであるのか
3. 学会等名 第4回日本こころの安全とケア学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下里誠二
2. 発表標題 ミーティングルーム「暴力のない現場を目指して」
3. 学会等名 第28回日本精神科看護専門学術集会（オンライン）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 浩司 (Yamazaki Hiroshi) (30378773)	静岡社会健康医学大学院大学・社会健康医学研究科・教授 (23806)	
研究分担者	百瀬 公人 (Momose Kimihito) (30230056)	信州大学・学術研究院保健学系・教授 (13601)	
研究分担者	西澤 公美 (Nishizawa Hitomi) (90573379)	信州大学・学術研究院保健学系・准教授 (13601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	木下 愛未 (Kinoshita Aimi) (50783239)	信州大学・学術研究院保健学系・助教 (13601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関